

夢には「諦めない理由」が必要だ

水谷謹人

元中学教師の腰塚勇人さんは、ある日突然体の機能を失った。スキーをしていた時の事故で首の骨を折った。2002年3月、36歳の時だった。

集中治療室で目が覚めた時、待っていたのは手足が全く動かない現実だった。「人生、終わった」と思った。教壇では「命の尊さ」を生徒に訴えてきたのに、その時の正直な気持ちは「死にたい」だった。食事も風呂も排泄も看護師の介助なしにはできなくなった。その屈辱の日々は耐えがたく、毎日死ぬことばかり考えた。

ある日、優しく声を掛けてきた若い看護師に「おまえに俺の気持ちが分かるか。偉そうなこと言うな」と口には出さなかったが、そんな気持ちでにらみつけた。

その気持ちが伝わったのか、看護師は「私、今、腰塚さんの気持ちを考えず言ってしまいました。ごめんなさい。でも本気で元気になってもらいたいです。お願いですからお手伝いさせてください」そう言って泣きながら病室を出ていった。

その夜、腰塚さんは何時間も泣いた。「ここに俺の気持ちを分かろうとしてくれている人がいる」と。

4月を前に学校側は腰塚さんを3年1組の担任にした。「ふざけるな。俺は寝たきりだぞ」と言ったが、見舞いに來た学年主任の先生は、「戻ってくるまで私が代わりに担任をします。卒業式では必ず腰塚先生が卒業生の名前を呼んでください」と言った。

リハビリで24歳の理学療法士から「腰塚さんの夢は何ですか？」と聞かれた時も、「ふざけるな。こんな体で夢なんか持てるか」と思ったが、リハビリの度に聞かれるので、半ばふて腐れて「夢はもう一度教壇に立つこと」と言った。そして「絶対無理だと思うけど」と付け加えた。

リハビリは過酷を極めた。何回やっても動かない手足。諦めそうになる度に3年1組の生徒の顔が浮かんだ。「待ってろよ！」と、また奮起した。

「それまではできない理由ばかり言ってきた。でもあの時、彼らの存在は諦めない理由になった。」と当時を振り返る腰塚さん。そして事故から4か月後、杖をつきながらではあったが、腰塚さんは本当に教壇に戻ってきた。

2016年12月、宮崎市立赤江中学校で開催された創立70周年記念講演会に腰塚さんが登壇した。講演会の後、70周年記念に石碑を建て、腰塚さんのメッセージを刻もうという話になった。「坂村真民先生の『念ずれば花開く』という石碑は全国にあるけど、腰塚さんの石碑はまだどこにもない。ここを第1号にしよう」と盛り上がった。

2017年4月6日、除幕式があり、腰塚さんも駆けつけた。正門近くに建てられた石碑には彼のメッセージ「五つの誓い」が刻まれていた。

口は人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう
耳は人の言葉を最後まで聴いてあげるために使おう
目は人のよいところを見るために使おう
手足は人を助けるために使おう
心は人の痛みがわかるために使おう

